

『古代アメリカ』15, 2012, pp.1-32

<論文>

先古典期から古典期にかけてのマヤ南部地域の墓制と社会

市川彰

(名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期・日本学術振興会特別研究員)

【要旨】

マヤ南部地域は、先古典期中期から終末期にかけて興隆した遺跡が多数存在し、文字や暦、石碑・祭壇複合など古典期マヤ文明を特徴づける文化要素を早くから有していたことから、マヤ文明の起源に関する研究に多くの影響をあたえてきた。

本論では、先古典期から古典期にかけての連続性に着目し、墓制という観点からマヤ南部地域の社会の階層化について検討した。先古典期後期ごろから各墓擴構造と副葬品の種類数に明瞭な相関関係がみられることから、階層秩序の存在を想定することができる。この結果はさらにヒスイ、貝、黒曜石、赤・黄鉄鉱製品という威信財の副葬率とあわせると明瞭になる。特に古典期前期は、これらの威信財獲得が当該期社会の上位階層者の権力を維持・強化することにつながっており、その権力の大小あるいは階層の差異が墓制の諸属性に反映されていたことを本論で指摘する。

【キーワード】

マヤ南部地域、墓制、社会階層、先古典期、古典期

【目次】

はじめに

1. 研究史と問題の所在
2. 研究の目的と方法
3. 先古典期前期から終末期のマヤ南部地域の墓制と社会
4. 古典期前期のマヤ南部地域の墓制と社会
5. 先古典期から古典期にかけてのマヤ南部地域の墓制と社会

おわりに

謝辞

はじめに

「マヤ南部地域」は、メキシコ・チアパス州の太平洋岸およびグリハルバ川上流域、グアテマラ

高地および太平洋岸、エルサルバドル西部を包含する領域をさす [Sharer and Traxler 2006; Love 2011: 7] (図 1・2)。マヤ南部地域は、タカリク・アバフ、イサバ、カミナルフユ、チャルチュアパなど先古典期中期から終末期にかけて興隆した遺跡が多数存在し、文字や暦、石碑・祭壇複合など古典期マヤ文明を特徴づける文化要素を早くから有していたことから、マヤ文明の起源に関する研究の対象となってきた [e.g. Demarest and Sharer 1986; Gifford 1976; Sharer 1978]。

1980 年代以降、メソアメリカ各地で先古典期遺跡の調査が進み、資料が増加するとともに、これまでの定説や解釈も再検討されるべき時期にあるといえる [e.g. Love and Kaplan 2011; Powis 2005]。こうしたマヤ考古学の大きな枠組み、そして後述する研究史をふまえ、本研究では墓制という観点に基づき、先古典期から古典期にかけてのマヤ南部地域社会の階層化の過程について考えてみたい。

なお、以下の時期区分にしたがい本論をすすめる [Demarest 2004]：先古典期前期（前 2000～1000 年）、先古典期中期（前 1000～400 年）、先古典期後期（前 400～後 100 年）、先古典期終末期（後 100～300 年）、古典期前期（後 300～600 年）。

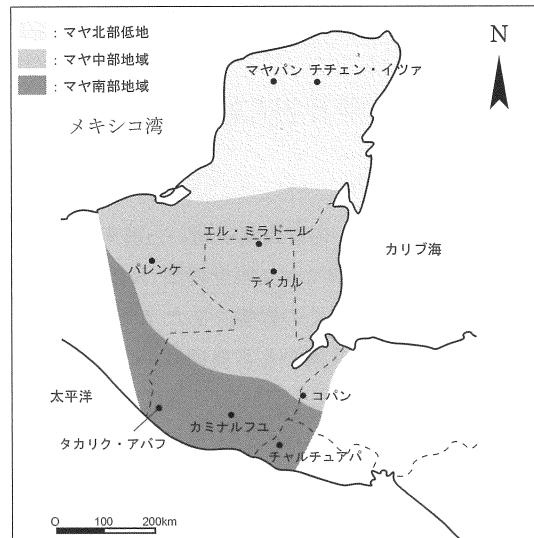


図 1 マヤ地域地図
(中村 2007 : 図 1 をトレース・改変)

1. 研究史と問題の所在

1-1. 研究史概略

先古典期から古典期のマヤ南部地域に関する先行研究を概観し、当該研究における現状と課題について整理する。

第1期：研究萌芽期（1915～1964 年）

考古学・人類学調査が本格的に開始される時期である。考古資料の増加にともない、当該地域の通時の変遷が理解されはじめ、他地域との比較研究のための基礎データが整ってきた時期と位置付けられる。寄贈資料や表採遺物をもちいた編年研究、メキシコ中央高原とマヤ南部地域間の相互関係などに関する研究がある [e.g. Longyear 1944; Lothrop 1939; Lowe 1962; Lowe et al. 1982; Shook 1952; Smith 1955; Smith and Kidder 1951; Spinden 1915; Thompson 1948]。

特に、カミナルフユ遺跡マウンド A・B や E-III-3 建造物の調査は重要である [e.g. Kidder et al. 1946; Shook and Kidder 1952]。先古典期後期の支配層の存在を想起させる豪華な副葬品をともなう墓の発見やメソアメリカ最大の国際都市ともいわれるテオティワカンとの関係が指摘されたからである。また、「マヤ低地の発展は、グアテマラ高地からトウモロコシ栽培が伝播した結果である」と想定されるなど [Kidder 1940: 121]、検討の余地は多分に残されていたものの、マヤ低地とマヤ南部地域

の関係が指摘されはじめたことも、マヤ南部地域の先進性を評価する上で重要である。

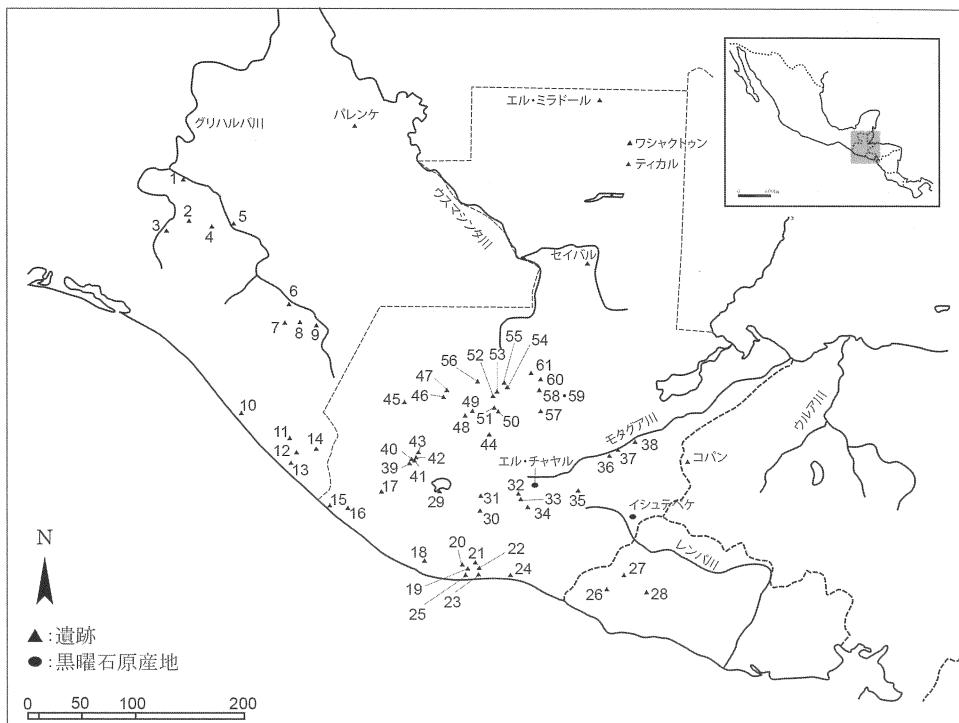


図2 マヤ南部地域地図と本研究で扱う資料

【チアパス高地】1.サン・イシドロ、2.オコソコアウトラ、3.ミラドール、4.サン・アグスティン、5.チアパ・デ・コルソ、6.ドン・マルティン、7.サンタ・ロサ、8.ラグナ・フランセサ、9.オホ・デ・アグア【チアパス太平洋岸】10.パンパ・エル・パホン、11.ビベロ、12.パソ・デ・ラ・アマダ、13.アルタミラ、14.イサバ【グアテマラ太平洋岸西部】15.ラ・ビクトリア、16.ウフシュテ（西）、17.タカリク・アバフ【グアテマラ太平洋岸中央】18.シン・カベサス、19.ロス・チャトス、20.マナンティアル、21.バルベルタ、22.マリナラ、23.サン・ホセ、24.チキウィタン、25.パライソ【エルサルバドル高地・太平洋岸】26.アタコ、27.チャルチュアバ、28.エル・カンビオ【グアテマラ中央高地】29.チュクムク、30.アラメダ、31.ウリアス、32.カミナルフユ、33.エル・ムラト、34.カンチョン、35.エル・チャギテ【モタガア川流域】36.ロス・ジャノス、37.アントムブラン、38.ラ・レフォルマ・ウィッテ【グアテマラ西高地】39.チェカハ・ウルビナ、40.エル・インスティトゥート、41.ラス・ビクトリアス、42.チョビセンテ、43.モンテ・ベージョ【グアテマラ北高地】44.サクアルバ、45.サクレウ、46.ロス・シミエントス・チュストゥム、47.ネバフ、48.ラ・ラグニータ、49.チラーモス、50.スリン、51.パスモロン、52.エル・ホコテ、53.チクルス、54.ラス・トゥナス、55.ロス・エンクエントロス、56.チグアイ、57.エル・モリノ、58.エル・ポルトン、59.サント・ドミニゴ、60.ロス・マンガレス、61.サン・アンドレス・サカバフ

第2期：研究発展期（1965～1991年）

マヤ南部地域とマヤ文明の起源に関わる議論が活発化し、マヤ考古学の重要なテーマとなった時期である。先古典期マヤ南部地域にはとりわけ古典期マヤ中部地域に特徴的な文化要素（神殿ピラミッド、文字・暦、石碑・祭壇複合など）が早くからみられ、階層化された社会が形成されていたと考えられるようになった [e.g. Coe 1965: 769; Demarest and Sharer 1986: 222; Michels 1979; Willey 1977: 438-439]。

1960年代後半以降、R・シャーラーらは先古典期後期のチャルチュアパ遺跡出土土器群とマヤ中部地域のバートン・ラミー遺跡やワシアクトゥン遺跡出土土器群との強い類似性を指摘し、これは単なる交易や土器技術の伝播によるものではなく、ある社会集団の拡散によって説明が可能であるとした [Gifford 1976; Sharer and Gifford 1970: 452]。さらに、エルサルバドル中央に位置するイロパンゴ火山の噴火の影響がこの社会集団の拡散を促したとしている^(註1) [e.g. Sharer 1974, 1978; Sheets 1983]。シャーラーが先古典期後期のチャルチュアパ社会を首長制社会と位置付けていることからも [Sharer 1978: 214]、先古典期後期マヤ南部地域は階層分化が進んだ社会と位置付けられるようになった。

1980年代に入り、研究はさらに展開する [e.g. Boone and Willey 1988; Demarest 1986; Fowler 1991; Urban and Schortman 1986]。A・デマレストは、詳細な土器分析から先古典期中期・後期の「プロビデンシア・ミラフローレス土器文化圏」の存在を提唱し、マヤ中部地域にみられるマヤ高地的要素を持つ土器群は在地の技術的・型式的発展の結果であり、1960～70年代に議論されたマヤ南部地域からマヤ中部地域への人の移住は積極的に評価されるべきものではないとした。同時に地域間/内相互関係が支配層の発達を促したと想定している [Demarest 1986: 173-186; 1988]。また、マヤ南部地域はイロパンゴ火山噴火により衰退はするものの、人の移住や断絶の痕跡はなく、むしろ継続的に古典期社会が営まれていたことを強調している。

カミナルフユ遺跡の研究では建築様式やセトルメント・パターンを中心にテオティワカンとマヤ南部地域の相互関係、社会の発展段階に関する議論も展開された [e.g. Michels 1979; Sanders and Michels 1977; Santley 1983]。こうした研究においても首長制段階の社会や支配層の存在が想定されている。

第3期：研究変革期（1992～現在）

メソアメリカレベルで先古典期社会研究が一段と進む時期であり、古典期社会の形成過程に関する研究に注目が集まるようになった時期である。

シャーラーは、エル・ミラドール遺跡の調査成果などをうけてマヤ文明の起源について再考の必要性を指摘している [Sharer 1992: 131]。N・グルーベもまた、それまでメソアメリカ、特にマヤ考古学の主要テーマであった古典期社会の崩壊に関する研究と同等に、古典期社会の起源や形成過程に関する研究の重要性を主張している [Grube 1995: 4]。

その後のマヤ南部地域の調査研究は、セトルメント・パターン研究から社会の複雑化や各政体間の支配領域の研究 [e.g. Bove 1989; Estrada-Belli 1999]、古典期以降の社会発展の要因を外部勢力とりわけテオティワカンとの関係に求める研究 [e.g. Bove et al. 1993; Bove and Medrano 2003; Demarest and Foias 1993; 大井 1994] が中心となっていました。その他、M・ポペノエ・デ・ハッチは、土器分

析をおこない先古典期から古典期にかけての変化をグアテマラ北西部のソラノ系土器集団のグアテマラ中央高地への拡散と関連づけて論じているなど [e.g. Popenoe de Hatch et al. 2011]、新たに蓄積された各地の調査成果が報告書や論文として発表されるようになった [e.g. Love and Kaplan 2011; Schieber de Lavarreda and Oregón Corzo 2010]。

1-2. 問題の所在

マヤ南部地域の先古典期から古典期に関する研究は、マヤ南部地域が古典期マヤに特徴的な文化要素を先古典期にすでに有していたという先進性とその急速な発展過程に注目がおかれてきたことがわかる。これらの研究は、土器、石彫、建造物、遠距離交易、外部勢力、セトルメント・パターンといったキーワードを中心に進められ、研究萌芽期からその背景に支配層の存在や首長制段階の社会を想定してきた。

しかし、これらの研究は、他地域と比較してマヤ南部地域が先進的であったこと、テオティワカンというメソアメリカ最大の都市国家との関係や発見された個々の考古資料から支配層の存在のみを強調することによって階層化された社会を想定しており、支配層や王権が生まれる背景、階層分化が進む過程や背景については未だ十分な理解が得られていないといえる。社会の階層化に関する問題は、マヤ考古学に限らずメソアメリカ考古学において取り組むべき重要課題として挙げられており [e.g. González Licón 2005; Joyce 2004; Marcus and Adams 2005; Powis 2005]、異なる視点に基づいて社会階層化の実態にせまる必要があるだろう。

また、先古典期から古典期への連続性を意識した研究、つまり通時的研究が少ない点も問題である。先古典期の先進性ばかりが強調される研究動向がひとつの要因として考えられる。これは上述した社会階層化に関する研究にとどまらず、あらゆる考古学的研究にあてはまる問題でもある。マヤ地域における通時的研究の有効性・重要性は青山和夫らによる石器研究の成果からもうかがえる [e.g. 青山 1998, 2007c ; 青山・ラポルテ 2009, 2011]。今後、その他の遺構遺物についてもより長期の歴史的展開を視野にいれ、先古典期から古典期への連続性に着目していくことが必要であろう。

2. 研究の目的と方法

2-1. 研究の目的

本研究の目的は、先古典期から古典期にかけてのマヤ南部地域における社会階層化の過程とその背景について考究することである。

なお、本研究は後述する分析視点・方法をもちいた当該地域では初めての研究である。同時に、扱う考古資料の性格上、依然として資料的制約がある。したがって、先の研究上の問題および研究目的を考察するための基礎的研究として本研究は位置付けられる。

2-2. 研究の視点と方法

本研究では、墓制という観点からマヤ南部地域の社会階層化について考える。墓制研究は社会の階層化や支配層の存在を研究する上で有効と思われるが、マヤ考古学全体的な傾向として意外に少ない。近年は、形質人類学的研究 [e.g. Tiesler 1998; Whittington and Reed 1997]、祖先崇拜と権力の

関係 [e.g. McAanny 1995; Fitzsimmons 2002] といった研究がさかんである。一方、墓それ自体あるいは墓にともなう遺物を扱った考古学的研究は、A・ルスや M・ウェルシュらの集成的研究をのぞけば [Ruz 1968; Welsh 1988]、副葬品の豊富な墓の報告、各遺跡の報告レベルにとどまっているのが現状であり、墓制という観点から先スペイン期社会の一侧面を解明する試みは重要である。以下に、本研究における分析視点と方法について説明する。

埋葬遺構やそれらにともなう副葬品の分析を含む墓制研究は、先史時代の社会的側面を理解するための最も有効な研究のひとつである [e.g. Binford 1971; Brown 1981; Pearson 2008; Tainter 1978; Wason 1994]。とりわけ、墓制には社会の「垂直位置（階層・階級における位置）」と「水平位置（特定集団・組織など同一位置）」が反映されると考えられているからである [e.g. Tainter 1977, 1978]。

C・カーは HRAF (=Human Relations Area File) に基づき、被葬者の社会における「垂直位置」と「水平位置」が墓制のどの部分において表象されるのか、その傾向について検討している [Carr 1995]。それによると「垂直位置」は、墓制全てにかかる労働投下量 (Energy expenditure) の大小に最も反映されるという。しかし、考古学的に検出される墓はあくまで埋葬終了時点の様子の一部が看取できるにすぎない。墓制には、埋葬前、埋葬時、埋葬後と様々な段階があり、当然それぞれの段階で人々の労働量が死者に対して累計的に費やされるものと考えられる。したがって、考古学的に全体の労働投下量を算出することは不可能であるといってよい。

こうした制約を理解しつつ、考古学的に検出される「墓」に関する諸属性に一定のパターンを認識することができれば、墓制における一部分について考察を深めること自体は無意味ではあるまい [Wason 1994: 30]。カーは、被葬者の社会における「垂直位置」を反映し考古学的に認識可能な属性として「墓壙構造」と「副葬品の種類数」をあげている。

「墓壙構造」は、形態、材質、構造、規模などから墓壙を作る際の工程をある程度復元できるだけでなく、その複雑さの度合いによって投下された労働量の大小が認識できる。「副葬品の種類数」は、多種か否かをみるとことで差異を検出することが可能であろう。そして、これらの属性の差異に一定の相関関係が看取できれば、社会を構成する人々の地位が墓制に反映されていたものと解釈することができる。一方で、「副葬品の多寡」や「埋葬体位」は「垂直位置」を示す指標としてはあまり有効でないとされている [Carr 1995]。

「水平位置」については、墓域の有無、墓域内における各墓の位置、区画化された墓域の有無を上位の属性にあげている。また、墓壙構造、埋葬体位、頭位方向、副葬品の種類などに一定の類似性がみられる場合、それらは社会内の「水平位置」を反映しているものと解釈できるという。以上の属性は、考古学的に検討することが可能であろう。しかし、「垂直位置」に比べて考古学的認識が難しい面があることが指摘されている [Carr 1995: 187; O'Shea 1981: 49-50]。

上述した民族事例に基づく結果を考古学的に古代社会における「垂直・水平位置」を安直に応用することに問題がないわけではない。時期・地域あるいは集団などの葬送儀礼の違いによって、垂直・水平位置を示す指標が異なる可能性も十分に考えられるからである。カーがもちいた分析資料にはマヤ地域を含むメソアメリカ地域の民族事例は取り上げられていない。また、墓自体にそうした社会的側面が表象されない場合があることにも注意しなければならないだろう [e.g. Hodder 1982]。

本研究では先行研究の分析視角に導かれつつ、それがマヤ南部地域に応用可能か否かという基本的問題にも留意しながら、マヤ南部地域の社会の階層化の過程とその背景について考究してみたい。

2-3. 分析にもちいる資料の性格と墓の諸属性

本研究でもちいる資料はすでに公に出版されている著書・論考・報告書を中心を集めて構成している。各行政機関に提出され一般公開やアクセスに制限がある報告書や博士論文などに収録されているデータはもちいていない。したがって、必ずしも扱っている資料数がこれまでに検出された埋葬資料全てを反映しているとは限らない点、各時期によって資料に地域的ばらつきがみられる点を明記しておく。

また、本研究は上記の刊行物に含まれる情報に基づいているが、墓壙規模や副葬品の種類などに関するデータが欠落しているものがあり、個々の埋葬資料から本研究にかかる全ての属性を抽出できているわけではないことも付け加えておく。

以上の資料的制約を考慮し、本研究ではマヤ南部地域という大きな地域的枠組みの中で各時期の特徴を抽出していくこととする。

①墓壙構造と規模

墓壙構造は、墓壙にもちいられる材質や墓壙規模などから土壙墓、石棺墓、石室墓、墓室墓、土器棺墓に分類される（図3・4）。

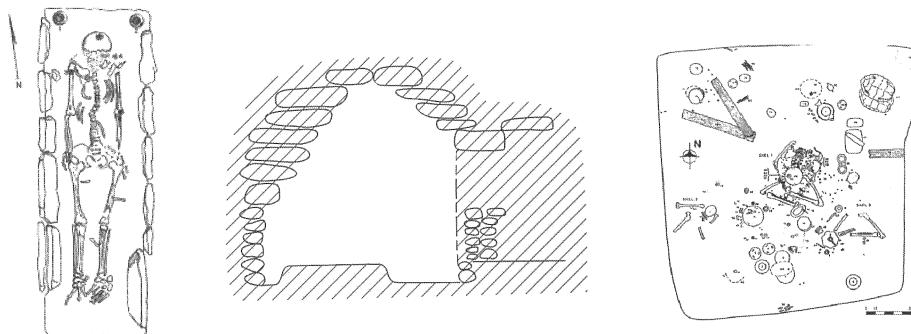


図3 墓壙構造の種類

左：石棺墓（Agrinier 1964: Fig.101）、中央：石室墓（Smith 1955: Fig.87 トレース・改変）、右：墓室墓（Kidder et al.1946: Fig.26） *スケールなし

土壙墓は、発掘時に土壙を的確に検出していらないものが多く、明確に土壙墓として区分できるものが少ない。本研究では、以下に述べる石材や木材などによる構造物がともなわない墓で、出土状況が全く把握できない墓以外は土壙墓とする。

石棺墓は、平石や石板などで構成され、石棺状を呈する。被葬者や副葬品を安置できる規模を有する。上部は平石や巨大な板状石で覆われる場合もあるが、覆われていない場合もある。また、巨大な石材を割り抜いた石棺もある。石棺墓の設置に投下される労働量は土壙墓のそれより大きいと考えられる。

石室墓は、複数の被葬者と大量の副葬品を安置できる空間を有している。屋根構造は石積みによりアーチ状をなす場合がある。羨道や入口を有するなど追葬を意図した構造を持つ墓もある。本研

究では、日干し煉瓦（アドベ）で同様な空間構造を持つ事例も石室墓に含む。石室墓への労働投下量は土壙墓や石棺墓よりも大きい。

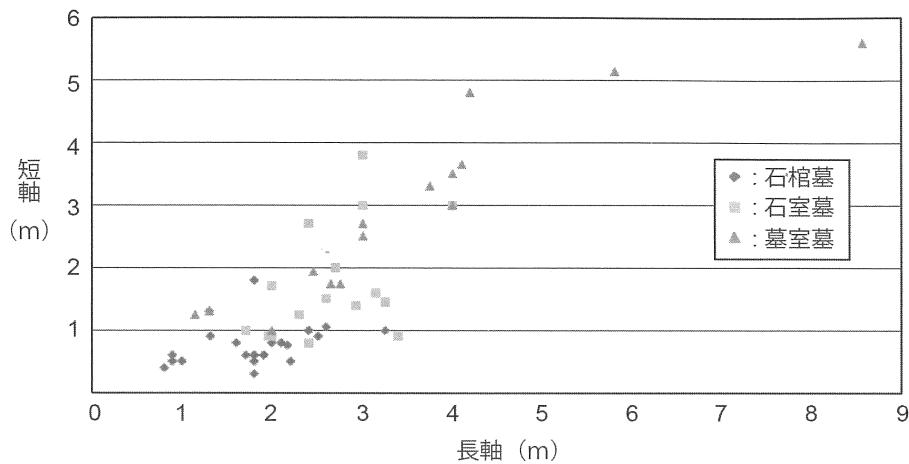


図4 墓壙構造と規模の関係
(本研究で扱う資料のうち墓壙規模の測定が可能な例のみ対象としている)

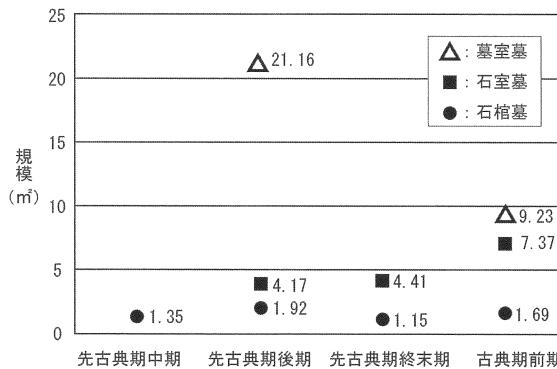


図5 各墓壙構造の平均規模の時期別推移

墓室墓は、カミナルフユ遺跡に代表的で、被葬者と副葬品を安置する方形または長方形の空間構造をもつ。柱穴や木材の痕跡から屋根上の覆いをかけていたと考えられる。土壙墓及び石棺墓よりは構造や規模から労働量は大きい。墓室墓と石室墓の労働投下量の比較は単純ではないが、少なくとも規模という点では墓室墓が最も大きい（図4・5）。

土器棺墓は、被葬者が幼児や子供を中心であること、出土地域がおおよそ太平洋岸地域に集中していることから、上述した墓壙構造とは異なる性格あるいは地域色の強い墓制のひとつと考える。したがって、本研究の分析では対象外にすることとし、稿を改めてその特徴などについて論じたい。

②副葬品の種類と組み合わせ

副葬品には土器を中心として、ヒスイ（緑色石）製品、貝製品^(註2)、黒曜石製品、赤・黄鉄鉱製品、石製品、土製品、木製品、骨製品、動物などを大分類として、さらに分類可能なものについては素材（玄武岩、アラバスターなど）と機能（首飾、耳飾、マノ・メタテなど）に分類した。その結果、計165種類の副葬品がある。

副葬品の中でも、ヒスイ（緑色石）製品、貝製品、黒曜石製品、赤・黄鉄鉱製品は原産地が限られているだけでなく、メソアメリカの世界観において重要であった^(註3)。これらは威信財として、時には生活必需品（特に、黒曜石の場合）として支配層の関与のもとで交換または入手された〔e.g. 青山2007a〕。こうした威信財などの交換は、階層化、複合社会や都市の形成や発展の要因として役割をはたしたと考えられており〔e.g. Aoyama 2001; Brumfield and Earle 1987〕、これらの製品の有無と組み合わせ、数量は支配層の存在や階層関係をみる上で有効な指標になりうると考える。

③その他の属性

その他の属性としては、頭蓋変工、歯牙変工^(註4)、頭蓋骨を土器で覆う行為、口内へのヒスイ埋納、赤色顔料の塗布、人身犠牲などの「特殊行為」や、埋葬体位、頭位方向、性別、年齢など主に人骨から得られる情報などがある。古人骨情報を得るには形質人類学的研究を要するが、各遺跡の土壤環境によりその保存状態が左右されること、報告書の人骨データの情報量に差があることを考慮すると地域レベルでの分析は難しい。ただし、その中でも「埋葬体位」については比較的多くの資料が得られたため、墓制の特徴を把握することも含め検討項目に加えた。

本論では、カーラの先行研究に導かれつつ、①墓壙構造と規模、②副葬品の種類数を主要な分析属性とし、③その他の属性について適宜①②との相関関係をみていくことにする。

3. 先古典期前期から終末期のマヤ南部地域の墓制と社会

3-1. 先古典期前期

対象遺跡は4遺跡；ビベロ、パソ・デ・ラ・アマダ、ラ・ビクトリア、アラメダである。チアパス、グアテマラ太平洋岸が中心である。しかし、資料が少ないため墓制についてはよくわからない。

墓壙構造は、全て土壙墓（8例）である。副葬品には雲母製鏡（ビベロ遺跡）、ヒスイ製品（パソ・デ・ラ・アマダ遺跡）がみられる。埋葬体位には、左側臥屈葬や俯臥伸展葬がみられる。チアパス太平洋岸のパソ・デ・ラ・アマダ遺跡では、建造物などの研究からこの時期に社会内の不平等や支配層がすでに存在していたと考えられている〔e.g. Blake 1991; Clark et al. 2000〕。しかし、墓制から階層化について論じる必要なデータは十分でなく、今後の資料増加を期待したい。

3-2. 先古典期中期

①墓壙構造と規模

対象遺跡は19遺跡；ウリアス、エル・ホコテ、エル・ムラト、カミナルフユ、カンチョン、サン・アンドレス・サカバフ、チラーモス、ラ・ラグニータ、ラス・トゥナス、ロス・エンクエントロス、

ロス・マンガレス、サン・イシドロ、ミラドール、サンタ・ロサ、チアパ・デ・コルソ、チャルチュアパ、パンパ・エル・パホン、ラ・ビクトリア、チキウィタンである。グアテマラ中央高地、北高地、チアパス高地に多い。

表 1 各墓壙構造における副葬品の種類数

時期	墓総数	全体平均	副葬品のない墓	土壙墓	石棺墓	石室墓	墓室墓
先古典期前期	8	0.3	5 (63%)	0.3	-	-	-
先古典期中期	96	1.1	40 (40%)	1.1	1.5	1	-
先古典期後期	248	1.3	92 (37%)	1.1	1.8	4	7.5
先古典期終末期	145	1.6	40 (28%)	1.3	3.1	2.9 (6.2)*	-
古典期前期	142	3.4	24 (16%)	2.2	3	3.9	11.9

* 盗掘被害が多いため、副葬品をもつ墓のみを対象とした場合の数値

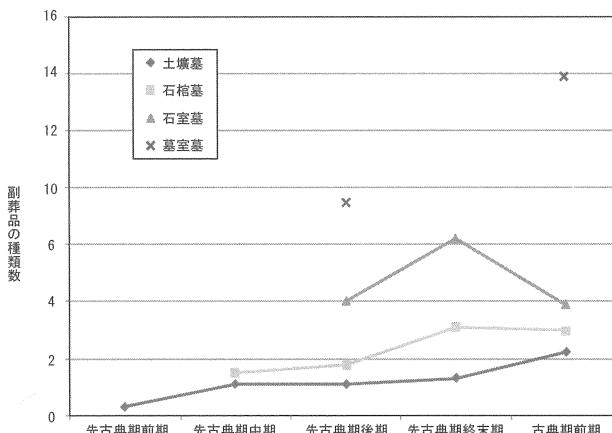


図 6 各墓壙構造における副葬品の種類数の時期別推移

墓壙構造は、土壙墓が主体である（93例）。石棺墓が2例、石室墓が1例、それぞれグアテマラ北高地（サン・アンドレス・サカバフ遺跡、ロス・マンガレス遺跡）、グアテマラ中央高地（カンチヨン遺跡）で出現する。石棺墓の規模は平均1.35m²である（図5）。石室墓の規模は不明である。

②副葬品の種類

副葬品は土器を中心に、ヒスイ製品、黒曜石製品、貝製品など計32種類ある。この時期に副葬品の種類が多様化し始める。

墓壙構造と副葬品の種類数の関係についてみてみよう（表1・図6）。全出土墓における副葬品の種類数は平均約1.1種類である。副葬品をもたない墓は40基約40%あり、全て土壙墓である。土壙墓は平均約1.1種類、石棺墓は平均約1.5種類、石室墓は平均約1種類であり、各墓壙構造間に大き

な差は看取できない。この時期、墓壙構造の複雑さと副葬品の種類数の関係は相関しないようである。

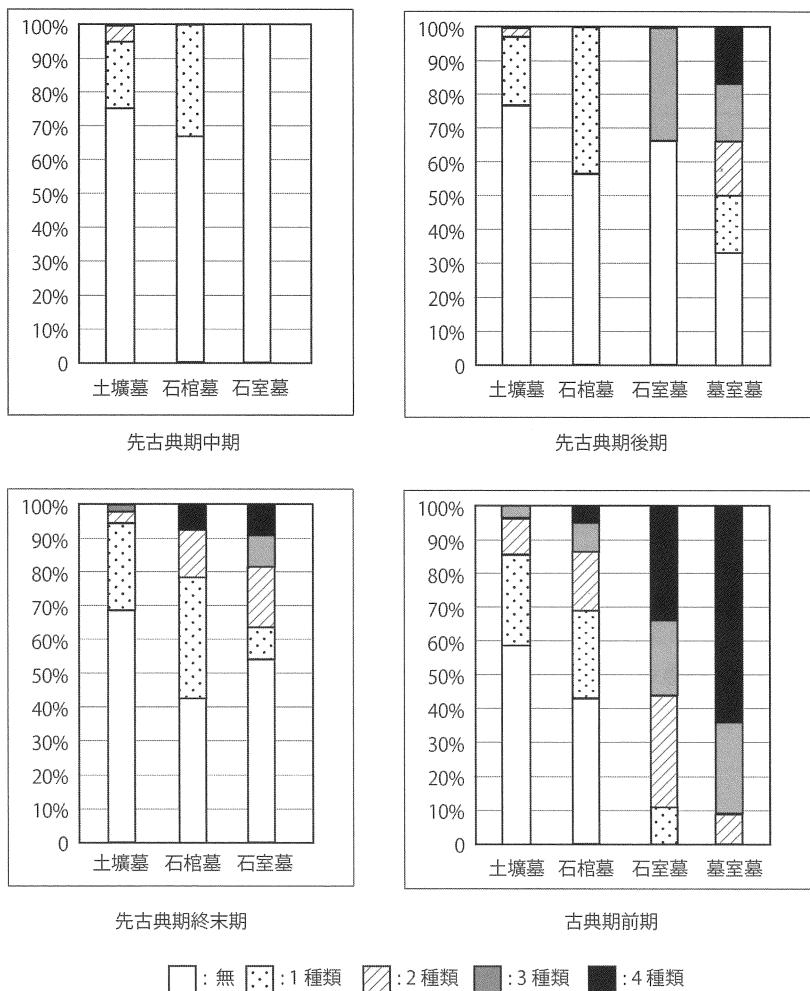


図7 各墓壙構造における威信財の副葬割合の時期別推移

貴重な資源と考えられるヒスイ製品、黒曜石製品、貝製品のいずれかが副葬される墓は土壙墓と石棺墓に大きな差はない(図7)。土壙墓全体では約25%と出土が限られており、2種類もつ墓になると5例約5%となる。カミナルフユ遺跡などがあるグアテマラ高地では「ヒスイ+黒曜石」の組み合わせが多く、チアパ・デ・コルソ遺跡などがあるチアパス高地、ロス・エンクエントロス遺跡のあるグアテマラ北高地では「ヒスイ+貝」の組み合わせが多く、副葬品組成に地域性がみられる。

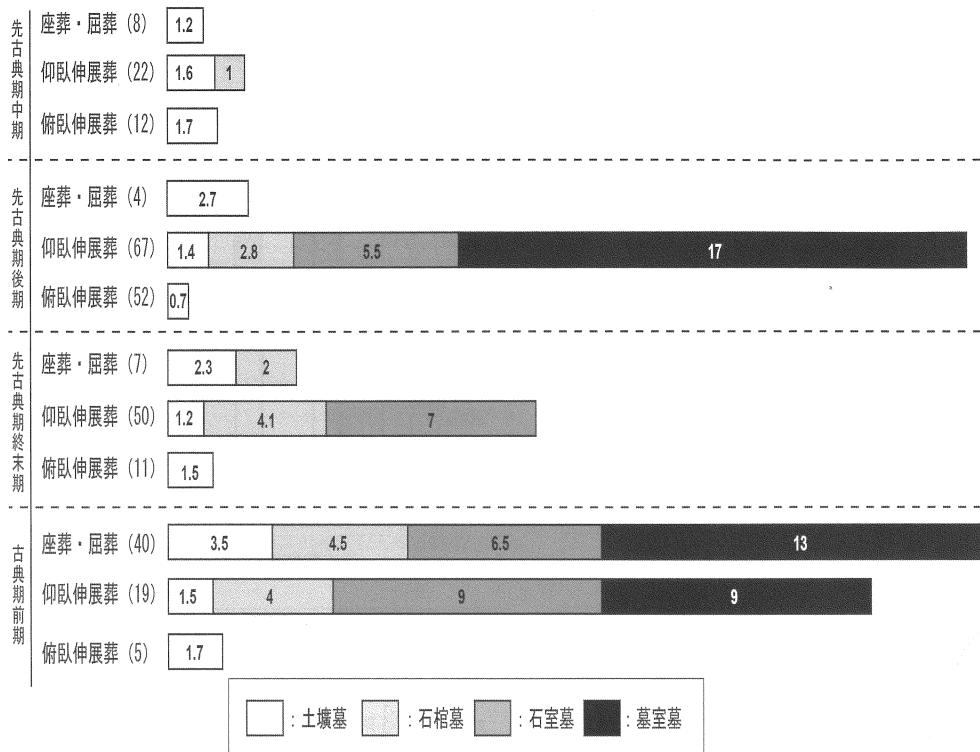


図8 埋葬体位と副葬品の平均種類数の時期別推移
数値は副葬品の平均種類数、()内の数値はサンプル総数を示す。

③その他の属性

頭蓋変工（1例）、歯牙変工（1例）、人身犠牲（7例）、赤色顔料の塗布（2例）、頭に土器を被せる特殊行為（3例）がみられる。墓制が複雑化し始めたことを示唆する。頭蓋変工と歯牙変工は生前に施行されるもので、新生児の時期（頭蓋変工の場合）から準備されることを考えると、被葬者は幼少期から生得的に特殊な扱いを受けていた人物と想定される。ロス・マンガレス遺跡やカミナルフユ遺跡では、主被葬者に対して複数の被葬者がともなっており人身犠牲がこの時期から開始されたことを示す。これらは上位階層者を想定する上で重要な指標と位置付けられる [e.g. Lujan and Oliver 2010]。

埋葬体位については、全体的に俯臥伸展葬と仰臥伸展葬が多い（図8）^(註5)。カミナルフユ遺跡やミラドール遺跡、チアパ・デ・コルソ遺跡、ラ・ラグニータ遺跡では仰臥伸展葬が多く、グアテマラ北高地やエルサルバドル高地では俯臥伸展葬が多いなど地域性がみられる。サン・イシドロ遺跡では座葬がみられる。埋葬体位と副葬品の種類数の関係は、俯臥伸展葬の方が仰臥伸展葬よりも副葬品の種類数が若干だが多い（図8）。威信財の副葬率も俯臥伸展葬の方が高い（図9）。

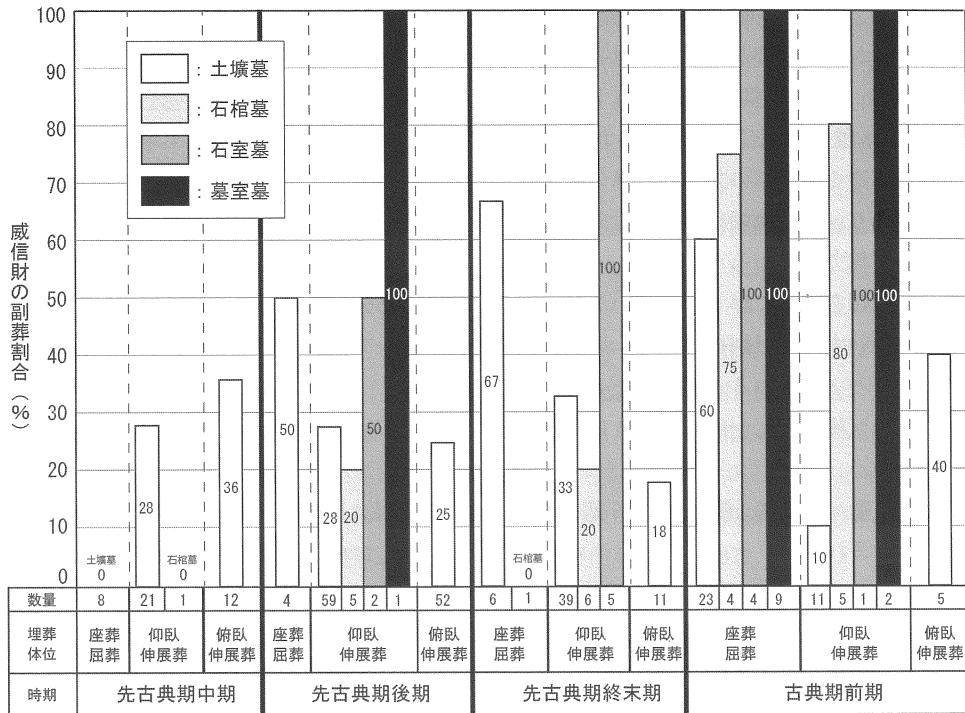


図9 埋葬体位と威信財の副葬割合の時期別推移

図の見方：例えば、先古典期後期の場合、仰臥伸展葬が土壌墓 59 例に確認でき、そのうち 28% に威信財が含まれていることを示す。

3-3. 先古典期後期

①墓壙構造と規模

対象遺跡は 18 遺跡；アタコ、エル・カンビオ、チャルチュアパ（エル・トラピチエ、ラ・クチージャ）、エル・ポルトン、カミナルフユ、サンタ・ロサ、チアパ・デ・コルソ、ミラドール、ラグナ・フランセサ、アルタミラ、ウフシュテ、シン・カベサス、ラ・ビクトリア、サン・アグスティン、エル・ホコテ、ロス・マンガレス、サン・イシドロ、イサパである。

土壌墓が主体である（232 例）。石棺墓（7 例）、石室墓（3 例）の割合が増加し、墓室墓（6 例）が出現する。

石棺墓はグアテマラ北高地、チアパス高地および太平洋岸、石室墓はグアテマラ北高地、チアパス高地で見られる。墓室墓はチアパス高地、グアテマラ中央高地でみられる。

墓壙規模の全体平均は、石棺墓 $1.92\text{m}^2 <$ 石室墓 $4.17\text{m}^2 <$ 墓室墓 21.16m^2 となる（図 5）。石棺墓の規模は、先古典期中期 (1.35 m^2) よりも僅かだが拡大傾向にある。

②副葬品の種類

副葬品は先古典期中期に続き土器が主体を成す。ヒスイ（緑色石）製品、貝製品、黒曜石製品、土製品、石製品（マノ、メタテ、キノコ石など）、骨製品、動物骨（鳥、犬、エイの尾骨など）、赤・

黄鉄鉱製品などの計 66 種類があり、先古典期中期に比べ副葬品の種類が豊富になる。

全出土墓における副葬品の種類数は平均約 1.3 種類である（表 1・図 6）。副葬品をもたない墓は 92 基約 37% ある。土壙墓は平均約 1.1 種類であり、先古典期中期とほぼ変わらない値を示す。石棺墓は平均約 1.8 種類、石室墓は平均約 4 種類、墓室墓は平均約 7.5 種類と前代よりも増加傾向を示す。複雑な墓壙構造をもつ墓の方が副葬品の種類数が多く、墓壙構造と副葬品の種類数の関係が相關している。つまり、先古典期後期は先古典期中期よりも階層分化がすすみ、階層秩序が明瞭になっていたものと解釈できるだろう。

副葬品の種類をさらに詳しくみていく（図 7）。土壙墓 56 基約 24% に、ヒスイ製品、黒曜石製品、貝製品のいずれかが副葬される。黒曜石製品はカミナルフユ遺跡などグアテマラ高地に多く、貝製品はチアパ・デ・コルソ遺跡などチapas 高地に多い。土壙墓では大半が单一で副葬され、2 種類（ヒスイ（緑色石）+ 黒曜石、ヒスイ+貝、貝+黒曜石）をもつ墓は 8 基、土壙墓全体の 4% にも満たない。

一方、石棺墓、石室墓、墓室墓の 16 基中 8 基にヒスイ製品、黒曜石製品、貝製品、黄鉄鉱製品のいずれかが含まれておりその副葬率は高い。とりわけ、カミナルフユ遺跡（E-III-3 建造物 5・6 号墓）とチアパ・デ・コルソ遺跡（3 号建造物）の墓室墓は、ヒスイ製品、黒曜石製品、貝製品、黄鉄鉱製品を含め 10 種類以上の製品が副葬されている。カミナルフユ遺跡では、赤・赤鉄鉱製のモザイク片や飾り板^(註6)が副葬されている他、エイの尾骨、チャート製エキセントリック石器、キノコ石など宗教祭祀的性格、イデオロギー的側面と関係の深い製品が副葬されている。

③その他の属性

土壙墓では、被葬者の頭蓋部に土器やメタテなどを被せる行為（21 例）、赤色顔料の塗布（8 例）、人身犠牲（11 例）、頭蓋変工（2 例）、歯牙変工（3 例）がみられる。一方、石棺墓・石室墓・墓室墓では人身犠牲（4 例）、赤色顔料の塗布（2 例）のみが看取される。

埋葬体位については、チapas 高地では仰臥伸展葬、エルサルバドル高地やグアテマラ中央高地などでは俯臥伸展が多い。副葬品の種類と埋葬体位の関係をみると、土壙墓では仰臥伸展葬（59 例）が平均約 1.4 種類、俯臥伸展葬（51 例）が平均約 0.7 種類、屈葬・座葬（4 例）が平均約 2.7 種類であり、埋葬体位により副葬品の種類数に差異が看取できる（図 8）。一方、副葬品の種類数が多い石棺墓、石室墓、墓室墓では仰臥伸展葬が主体であり、威信財の副葬率が高い（図 9）。

3-4. 先古典期終末期

①墓壙構造

対象遺跡は 20 遺跡；エル・ポルトン、エル・チャギテ、オコソアウトラ、サン・イシドロ、サンタ・ロサ、チアパ・デ・コルソ、チャルチュアパ（ラ・クチージャ）、ロス・エンクエントロス、ドン・マルティン、パスモロン、ミラドール、ラ・ラグニータ、バルベルタ、マリナラ、ロス・チャトス、エル・インスティトゥート、チェカハ・ウルビナ、チョビセンテ、モンテ・ベージョ、ラス・ビクトリアスである。

土壙墓（116 例）が主体で、石棺墓（14 例）、石室墓（15 例）が増加する。一方、墓室墓が消失する。先古典期終末期は、とくにグアテマラ西高地で持ち送り式の屋根構造を持つ石室墓（ラス・

ビクトリアスなど) が出現し、厚葬化が急速に進行したようである。墓壙規模の全体平均は、石棺墓 $1.15m^2$ < 石室墓 $4.41m^2$ である。先古典期中期・後期に比べ、石室墓については若干の増加傾向、石棺墓については若干の縮小傾向にある (図 5)。

②副葬品の種類

副葬品は土器が主体を成す。ヒスイ (緑色石) 製品、貝製品、黒曜石製品、土製品、石製品、骨製品、動物骨 (鳥・犬・エイの尾骨など)、赤・黄鉄鉱製品などの計 56 種類あり、先古典期後期に比べ副葬品の種類数はわずかながら減少する。

全出土墓の副葬品の種類数は平均約 1.6 種類である (表 1・図 6)。副葬品をもたない墓は全体で 40 基約 28% である。土壙墓は平均約 1.3 種類であり、ほぼ先古典期後期と変わらない。石棺墓は平均約 3.1 種類、石室墓は平均約 2.9 種類である。グアテマラ西高地は盗掘被害が多く石室墓はほとんど副葬品をともなっていない事例が多いこともあり、これらを分析対象から除外すると、平均約 6.2 種類となる。複雑な墓壙構造をもつ墓の方が副葬品の種類数が多く、墓壙構造と副葬品の種類数に相関関係がみられる事から、墓壙構造間に階層秩序の存在が想定される。

威信財の副葬割合 (図 7) をみてみると、ヒスイ (緑色石) 製品、黒曜石製品、貝製品、赤・黄鉄鉱製品のいずれかをともなう土壙墓は 36 基、土壙墓全体の約 31% である。多くは単一で副葬されることが多く、2 種類以上の組み合わせ (ヒスイ+貝、ヒスイ+黒曜石、ヒスイ+黒曜石+赤・黄鉄鉱、ヒスイ+貝+赤・黄鉄鉱) をもつ墓は 6 基約 5% となる。資料母数が少ないため単純な比較は難しいが、土壙墓におけるこうした複数の威信財を含む墓の割合は、先古典期後期よりも若干増加傾向にあるようである。

一方、石棺墓、石室墓 29 基中 13 基、約 45% (盗掘被害の多いグアテマラ西高地をのぞくと 65%) にヒスイ製品、黒曜石製品、貝製品、赤・黄鉄鉱製品のいずれかが含まれている。これらの製品が 2 種類含まれる墓は 7 基、3 種類含まれる墓が 1 基、4 種類含まれる墓が 2 基である。特にラ・ラグニータ遺跡では 14~15 種類の副葬品が含まれており、この時期では突出している。注目したいのは「ヒスイ+貝+黒曜石+赤・黄鉄鉱」という 4 種類の組み合わせであり、石棺墓 1 基 (ラ・ラグニータ遺跡)、石室墓 1 基 (チアパ・デ・コルソ遺跡) のみにみられる。

また、黒曜石製品の副葬例が全体で 11 例約 7% と少ない点は興味深い。

④その他の属性

土壙墓では、頭蓋変工 (6 例)、赤色顔料の塗布 (4 例)、歯牙変工 (2 例)、人身犠牲 (1 例) がみられる。頭蓋変工、歯牙変工の施された被葬者には、ヒスイ製品が副葬されている場合が多い (4 例)。石棺墓や石室墓では、人身犠牲 (2 例)、歯牙変工 (3 例)、赤色顔料の塗布 (4 例) がみられ、墓にはヒスイまたは貝製品が必ず副葬されている。チアパ・デ・コルソ遺跡では、炭化物が多く検出されることから火をもちいた葬送儀礼の存在が考えられる。

埋葬体位は仰臥伸展葬が多い (図 8)。俯臥伸展葬はエルサルバドル高地やグアテマラ中央高地に限られるようになる。これらは、出土位置が住居床下 (エル・チャギテ遺跡) や建造物群にともなわない墓域 (チャルチュアパ遺跡ラ・クチージャ地区) という出土状況である。座葬がチアパス高地 (チアパ・デ・コルソ遺跡) で増加傾向にある。チアパ・デ・コルソ遺跡の土壙墓から 4 例、石棺

墓 1 例から胡座葬が確認できる(図 10)。ラ・ラグニータ遺跡の石棺墓からも、仰臥だが胡坐をかいた埋葬体位がみられる。石棺墓や石室墓では、先古典期後期同様に仰臥伸展葬の割合が約 95% と高く、上述したように副葬品の平均種類数も多い。

埋葬体位と副葬品の種類数の関係は、土壙墓では明らかに座葬・屈葬に副葬品の種類数、威信財の副葬割合が高い(図 8・9)。一方、石棺墓や石室墓においては仰臥伸展葬の例が多く、かつ副葬品の種類数、威信財の副葬割合が高い(図 8・9)。

4. 古典期前期のマヤ南部地域の墓制と社会

4-1. 古典期前期

①墓壙構造

対象遺跡は 25 遺跡; アントムプラン、オホ・デ・アグア、カミナルフユ、サンタ・ロサ、スリン、チアパ・デ・コルソ、チャルチュアパ(タスマル)、チュクムク、ミラドール、レフォルマ・ウイテ、ロス・ジャノス、ロス・マンガレス、サン・ホセ、パライソ、バルベルタ、マナンティアル、ロス・チャトス、イサバ、エル・モリノ、サント・ドミンゴ、サクレウ、サクアルアパ、ネバフ、ロス・シミエントス・チュストムス、ツイグアイである。

墓壙構造は、土壙墓(88 基)が主体である。石棺墓が 24 基、石室墓が 17 基、墓室墓が 13 基である。明らかに先古典期よりも厚葬墓の数が多い。カミナルフユ遺跡の墓室墓は、柱穴や屋根構造を有するなど地域独自の墓壙構造であるといえる。石室墓と石棺墓はサクレウ遺跡やネバフ遺跡で多く、チアパス高地でもミラドール遺跡で石棺墓と石室墓の増加がみられる。

墓壙規模の全体平均を見てみると、石棺墓 $1.69m^2 <$ 石室墓 $7.37m^2 <$ 墓室墓 $9.23m^2$ となる(図 5)。墓壙規模は先古典期後期・終末期よりも拡大傾向にある。

②副葬品の種類

古典期前期も土器が主たる副葬品である。その他にはヒスイ製品、貝製品、黒曜石製品、赤・黄鉄鉱製品、土製品、石製品、骨製品、動物骨など計 93 種類がある。

全墓壙構造の副葬品の種類数は平均約 3.4 種類であり、先古典期終末期に比べおよそ倍増している(表 1・図 6)。副葬品をもたない墓は全体で 24 基約 16% とこれまで最も少なく、墓に副葬品をいれることがいざれの墓壙構造においても慣習化されたと考えられる。土壙墓には平均約 2.2 種類の製品が副葬される。これは先古典期終末期に比べて多い。石棺墓は平均約 3 種類と先古典期終末期とほぼ変わらない。石室墓は平均約 3.9 種類である。再び出現する墓室墓は平均約 11.9 種類と極めて高い。墓室墓とそれ以外という二極化の様相がうかがえる。

副葬品組成についてみてみよう(図 7)。威信財がともなう土壙墓は 36 基約 41% である。先古典期終末期よりもその割合は高い。单一で副葬される例が多いが、2 種類副葬される墓が 9 基 10%、3

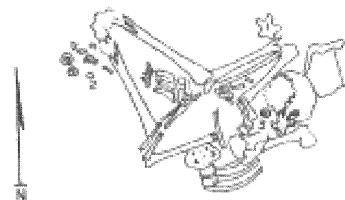


図 10 チアパ・デ・コルソ遺跡出土 174 号墓
人骨 (Agrinier 1964; Fig.116)

種類副葬される墓も3基約3%みられる。石棺墓では14基約58%に威信財が1種類以上副葬される。2種類の威信財がともなう墓は5基16%で、3種類の威信財がともなう墓は2基約8%、4種類の威信財が入る墓は1基約4%である。石室墓では9基約53%にみられる。1種類の割合が1基約6%、2種類の割合が3基約16%、3種類の割合が2基約11%、4種類の割合が3基約16%である。墓室墓では11基約85%に威信財が副葬され、2種類が1基約12%、3種類が3基約16%、4種類が7基約58%である。

土壙墓・石棺墓では3種類以上の威信財をもつ墓の割合が減少するが、石室墓ではその差があまりみられず、墓室墓の場合にはむしろ多くの威信財を有する墓が増加する傾向にある。これらのデータは墓壙構造間の格差だけでなく、墓壙構造内においても格差が生じていることを示し、社会内の階層分化がより複雑化したことを示唆するといえよう。

さらに、先古典期終末期に初出した「ヒスイ+貝+黒曜石+赤・黄鉄鉱」という威信財の組み合わせについては、グアテマラ中央高地カミナルフユ遺跡の墓室墓、グアテマラ北高地ネバフ遺跡、チアパス高地チアパ・デ・コルソ遺跡の石室墓のみで確認できる。とくに、ヒスイ製品・貝製品・黒曜石製品がともなうことはあっても、赤・黄鉄鉱製品がともなわないものが多いことから、赤・黄鉄鉱製品の重要性がうかがえる。赤・黄鉄鉱製品が土壙墓・石棺墓からはそれぞれ1点しか確認できることからも他の製品と比較し、その重要性が極めて高いことがわかる。

③その他の属性

特殊行為は、土壙墓から墓室墓までうかがえる。土壙墓では歯牙変工（6例）、赤色顔料の塗布（5例）、人身犠牲（4例）、頭蓋変工（3例）がみられる。そのうち約56%（18例中10例）に、ヒスイ、黒曜石、貝製品といった威信財がともなっている。石棺墓・石室墓・墓室墓では、人身犠牲（24例）の急激な増加がみられる。その他、歯牙変工（3例）、頭蓋変工（4例）、赤色顔料の塗布（5例）がみられる。また、石棺墓や石室墓では火を使用した儀礼を類推させる炭化物も検出されている（5例）。頭蓋変工は石棺墓の被葬者ではみられる。石室墓や墓室墓の被葬者には歯牙変工は確認できるものの頭蓋変工は確認できなかった。

埋葬体位については、俯臥伸展葬がほぼ消失し、全体的に座葬・屈葬が多くなる点が特徴的である（図8）。さらに座葬の中でも胡坐葬は、グアテマラ中央高地カミナルフュ遺跡の墓室墓、チアパス高地ミラドール遺跡の石室墓と土壙墓に集中的にみられる。

副葬品の種類数と埋葬体位の関係をみてみよう（図8）。土壙墓では座葬・屈葬への副葬品の種類数が多い。先古典期までは墓壙構造が複雑でかつ副葬品の種類数が多い墓には仰臥伸展葬が多かった。一方、古典期前期は、座葬・屈葬の被葬者が多くの副葬品をもち、高い威信財の副葬率がみられる（図9）。座葬・屈葬は、土壙墓における威信財副葬率でも高い割合を示す（約57%）。石室墓と墓室墓では、仰臥伸展葬・座葬・屈葬には必ず威信財が副葬される。

5. 墓制からみた先古典期から古典期にかけてのマヤ南部地域の社会

5-1. 先古典期から古典期にかけてのマヤ南部地域の社会階層化の過程

本節では、前章までに提示したデータをもとに、マヤ南部地域の社会階層化の過程とその背景に

について検討してみたい。

先古典期前期：墓制からは資料不足のためこの時期についてはよくわからない。

先古典期中期：墓壙構造、副葬品の種類数、特殊行為、埋葬体位をみると墓制が先古典期前期よりも複雑化していることは明確である。土壙墓より労働量が必要な石棺墓や石室墓といった墓壙構造が出現するが3例と少ない。また「墓壙構造」と「副葬品の種類数」の関係は必ずしも相関しない。簡素な土壙墓の方が副葬品の種類数が多く、全体的にヒスイや黒曜石などの威信財が副葬される例はまだ少ない。土壙墓において特殊行為を施される人物が全体の約14%と限られることから、こうした墓に埋葬された人物が当該期社会における地位の高い人物であったと考えられる。埋葬体位は、仰臥伸展葬で埋葬される被葬者の方が若干だが副葬品の種類数が多い。

このように、先古典期中期に社会が複雑化し、階層化の萌芽ともいえる社会内の個人または集団間に差異が表出する。こうした傾向は近年のマヤ考古学の定説とも矛盾しない [e.g. 青山 2007a; Demarest 2004; Houston and Inomata 2009; Sharer and Traxler 2006]。カミナルフユでは副葬品の有無が顕著に存在しており、他地域よりも社会の階層化が特に進行していたと推察される。しかし、マヤ南部地域全般には労働量の多い石棺墓や石室墓が出現するものの、墓壙構造、副葬品の種類数、威信財の副葬割合の関係からは先古典期中期段階では必ずしも明確な階層意識に基づいて階層化が進んだものではないようである。

先古典期後期：大規模な建造物群の造営活動や石彫製作されるなどマヤ南部地域が急速に発展する時期である。墓制からもこれらを支持する傾向がみられる。墓壙構造、副葬品の種類、特殊行為が多様化しており、先古典期中期と比較しても墓制は一層複雑化したものと思われる。重要な点は、「墓壙構造」と「副葬品の種類数」に相関関係がみられ、厚葬化した墓と簡素な墓の差異が顕在化する点である。つまり、社会内における階層意識や階層分化がより一層進んだものと考えられる。なかでも、カミナルフユ遺跡やチアパ・デ・コルソ遺跡では、突出した労働量を墓制に投下させることができる支配層または王権の存在を想起させる。

墓壙構造と威信財の副葬割合の関係はさらにこうした解釈の蓋然性を高める。土壙墓では約25%の墓にヒスイ製品、貝製品、黒曜石製品のいずれかが含まれるが、2種類を有する墓は土壙墓全体では1%にも満たない。3種類以上もつ墓は現在のところ確認できていない。土壙墓に埋葬される人々の貴重な資源へのアクセスが制限されていたことがうかがえる。

一方、石棺墓・石室墓・墓室墓にはヒスイ製品、貝製品、黒曜石製品、赤・黄鉄鉱製品のいずれかが約50%の墓にともない、土壙墓の被葬者よりもその副葬率が高い。「ヒスイ+貝+黒曜石+赤・黄鉄鉱」の4種類の組み合わせがカミナルフユ遺跡の墓室墓、「ヒスイ+貝+黒曜石」の3種類の組み合わせがチアパ・デ・コルソ遺跡の石室墓など厚葬化された墓に限定的にみられることがわざがわかる。

こうした貴重な原材料を加工した製品の出現パターンは、各原材料とそれを加工した製品が当該期社会において固有の意味をもちはじめ、権力を強化・正当化する威信財として確立してきたためと考えられる。そして、上位階層者を想起させる厚葬墓に威信財の副葬率が高いことは、威信財獲

得のための遠距離交易が上位階層者にとって権力強化・維持のための重要な戦略のひとつとなり、それらをコントロールし始めたことを示唆するものであろう。こうした背景に基づいて獲得される権力の大小が、葬送儀礼の中で墓壙規模や副葬品の種類数に表象された。

特殊行為は土壙墓が多く、石棺墓・石室墓・墓室墓では人身犠牲と赤色顔料の塗布に限られる。ただし、土壙墓では約20%程度しかみられず、特殊行為の施された人物は限られていたと想定される。埋葬体位は、墓壙構造と副葬品の種類数と相関する。つまり、墓壙構造が複雑かつ規模が大きく、副葬品の種類数が多い石室墓や墓室墓では、仰臥伸展葬が多いという傾向がある。一方、土壙墓においては多くの副葬品を有するのは座葬・屈葬である。

この時期、イサパ遺跡やタカリク・アバフ遺跡、モンテ・アルト遺跡など太平洋岸地域では支配層の存在を想起させる超自然的なモチーフに代表される石彫文化が広がっていた [e.g. Guernsey 2006; Popenoe de Hatch 1989; Smith 1984]。

注目したいのは、タカリク・アバフ遺跡で出土した豊富な副葬品をともなう先古典期後期の支配層の墓である [Popenoe de Hatch et al. 2011; Schieber de Lavarreda 2003]。7A 建造物正面の中心軸線上でみつかったこの1号墓は、辰砂がかけられたベッド状の中心部とその周りに配置された副葬品の豊富さから先古典期後期タカリク・アバフの重要人物と考えられている。ヒスイ製首飾り・耳飾り・鼻飾り・仮面、841個もの黄鉄鉱製モザイク片でつくられた鏡、サン・マルティン・ヒロテペケ産黒曜石製石刃・剥片、貝製耳飾り・ビーズ、有機質素材でつくられた容器、少なくとも10点以上の土器や香炉といった副葬品をもつ。

このように太平洋沿岸部においても階層分化が進んでいたことを示す極めて重要な資料は存在するものの、その他の地域と比較して太平洋沿岸部は墓制資料が不足しているのが現状である。調査がまだ十分に行き届いていない、あるいは墓自体が石彫や建造物のある区域ではなく、別の場所に存在する可能性も十分に考えられるため今後の調査の進展を期待したい。

先古典期終末期:先古典期終末期のマヤ地域各地で都市の衰退や放棄が起こるとされている[e.g. 青山 2007a; Demarest 2004; Sharer and Traxler 2006]。では、墓制からはどのような傾向が読み取れるのか。

墓壙規模については、石棺墓は若干の縮小傾向にあるが、土壙墓<石棺墓<石室墓という傾向は先古典期後期同様に変わらない。

副葬品の種類数については先古典期後期よりも増加し、墓壙規模と比例して副葬品の種類数は多くなる。つまり、各墓壙構造間に一定の階層秩序が想定される。威信財の副葬率については土壙墓では約30%、石棺墓・石室墓では約50%である。土壙墓では大半が単一副葬であること、石棺墓・石室墓では複数の製品が副葬される墓が多いという違いがある。したがって、石棺墓・石室墓への被葬者が威信財獲得に積極的に関与したことが考えられる。

4種類全ての威信財を有する墓は、ラ・ラグニータ遺跡 A7号建造物出土のC-44号墓とチアパ・デ・コルソ遺跡1号建造物1号王墓でしかみられない。これらの墓は副葬品の種類数が多く、墓壙構造の規模も大きいことから当該期において極めて社会的地位の高い人物として評価することができよう。

威信財をともなう被葬者には、頭蓋変工、歯牙変工、赤色顔料の塗布、人身犠牲の特殊行為が施

されている。土壙墓、石棺墓、石室墓いずれの墓にもこうした行為が限定的にみられることから、各位相間の中でも重要あるいは特殊な扱いを受けた人物であった可能性がある。

埋葬体位は前代までのあり方を継承している。つまり、厚葬墓に仰臥伸展葬が多く、土壙墓には座葬・屈葬に多くの副葬品が副葬されている。

カミナルフユでは、先古典期後期ほどの権力者の存在意義とそれを支える階層構造が継続しえなかつたと推察される。先古典期後期にはE-III-3号建造物にともなう墓に象徴されるような突出した上位階層者がいたにもかかわらず、そうした階層意識が社会に浸透せず、新しい階層秩序を形成できなかつたことが要因として考えられる。こうした状況は、より多くの威信財やその他の権力資源を独占しようとする上位階層者とそうではない位相の人々との確執を示唆しているのかもしれない。カミナルフユ遺跡の近くにはエル・チャヤルやイシュテペケなど有名な黒曜石の原産地があり、カミナルフユはこの黒曜石の入手・交易において重要な地位を有していたと想定されるが、この時期に黒曜石副葬の割合が減少することは示唆的である。

先古典期終末期の衰退の要因としては、環境変化や戦争といった要因が指摘されている [e.g. 青山 2005; Braswell and Robinson 2011; Clark et al. 2000]。本研究が示す結果は、社会的地位の高い有力者間の威信財獲得をめぐる競合関係あるいは抗争の激化、階層秩序の確立をめぐる各社会構成員の戦略の不一致を示唆しているのかもしれない。墓への労働量が前代より増加していない点からも権力者の求心力の低下が推察される。あるいは墓制に社会的重要性を反映させなくなったのかもしれない。

古典期前期：カミナルフユが再興する時期であり、マヤ中部地域のティカルでは紀元後1世紀頃から続いた王朝が一度断絶し、新王朝が誕生するなどマヤ地域全体が一気に興隆する時期である。

墓壙構造についてはグアテマラ北高地サクレウ遺跡やネバフ遺跡、チアパス高地のミラドール遺跡では石棺墓や石室墓、カミナルフユ遺跡では墓室墓が増加する。墓壙構造の規模は先古典期のそれよりも大きく、墓制に多くの労働量が投下されたようになったことを意味する。さらに、墓壙構造と副葬品の種類数の差異に明瞭な相関関係が看取できる。

先古典期終末期と異なる点は二極化が進んでいることである。土壙墓・石棺墓・石室墓間の格差はさほど大きくなないが、これらの墓壙構造と墓室墓にみられる副葬品の種類数の差は歴然としている。つまり、一定の階層秩序が存在しつつも社会は二極化され強力な王権が誕生していたことが想定される。それは、グアテマラ中央高地、グアテマラ北高地、チアパス高地に顕著である。

太平洋岸については、タカリク・アバフにおいてヒスイ製首飾りをもち、「Señor de la Greca」と名付けられた重要人物の石棺墓がみつかっており、先古典期からの支配層の系譜が存続していたことがわかっている [Schieber de Lavarreda y Orrego Corzo 2011, 2012]。

古典期前期は、石室墓や墓室墓といった厚葬墓において人身犠牲が大幅に増加する。一人の主被葬者に対して複数の人物あるいは頭蓋骨のみを葬る場合がある。人身犠牲が当該期の主被葬者の権力を示すひとつの指標であったと評価できる。その他の特殊行為も興味深い。厚葬墓への被葬者には頭蓋変工や歯牙変工など生前に施される特殊行為はむしろ少なく、土壙墓に埋葬される人物に多く確認できるのである。頭蓋変工や歯牙変工が施された人物が特異な人物として社会内に存在するとしても、高い社会的地位を得られたわけではないようである。こうした観点からみれば、先古典

期中期・後期にみられる階層秩序とは異なる様相を示す。

埋葬体位では、俯臥伸展葬の習慣はほぼみられなくなり、仰臥伸展葬が残り、座葬・屈葬が全体的に増加する。埋葬体位と墓壙構造と規模、副葬品の種類数、威信財の副葬率の関係からも、座葬とりわけ胡座葬が上位階層者を示す指標となりうることから先古典期までとは異なる原理に基づいて階層秩序が形成されている。

さらに興味深い点は土壙墓における威信財の副葬率である。古典期前期の土壙墓では、先古典期の土壙墓と比較すると威信財副葬の割合が高くなる。先古典期終末期までは、約25~30%の土壙墓に4種類の威信財のうちいずれかが副葬されていた。一方、古典期前期ではその割合が約40%と増加する。この上昇を下位階層者の権力の増大と考えるか、あるいは上位階層者が遠距離交易によつてもたらされる威信財などを占有するのではなく、下位層の人々にも再分配することによってその権威を強化・正当化したと考えるか意見はわかれるところであろう。ここでは、後者を支持したい。

古典期前期は、外部との接触の増加、外来の器物やイデオロギーの受容と利用が上位階層者にとって貴重な権力資源としての役割をはたしている。とりわけ、マヤ地域におけるテオティワカンの影響は無視できない [e.g. Braswell 2003]。マヤ南部地域ではカミナルフユ遺跡、ミラドール遺跡、サクレウ遺跡の厚葬墓において、テオティワカン系の三脚円筒形土器、水差し形土器、カンデレーロ、パチューカ産の緑色黒曜石がみられることは、テオティワカンとの直接的または間接的関係を示唆する。こうした外部との関係を構築し社会内で顯示することによって、権力の強化・維持に成功したのではないだろうか。上位階層者は遠距離交易または外部要素の受容という戦略を階層秩序の維持・強化のために展開していくと考える。

ヒスイ製品、黒曜石製品、貝製品、赤・黄鉄鉱製品もまた上位階層者の権力を維持あるいは固定化するために重要であった。とりわけ、鏡または飾り板としての機能をもつ赤・黄鉄鉱製品は出土する墓が限定されることからも、際だった重要性を有していたと考える。上位階層者は、これらの製品のいずれかを所有することを下位の人々に許容することはあっても、分配をコントロールし、その全ての組み合わせを下位の人々に所有させることはなかった。こうして各墓壙構造間では階層構造の二極化が進んでいく一方、同一位相内、つまり同じ墓壙構造レベルでは威信財の副葬割合が示すように細かな階層分化が進んでいたと考えられる。

このように先古典期から古典期にかけて墓制が変化するとともに社会も変容してきたことがわかる。墓制からみる古典期社会は、新しい階層秩序の創出と安定、階層の二極化が進んだ社会であったと考えられる。

5-2. 墓制からみた社会階層の指標

これまで述べてきたように、本論でもちいてきた墓制の諸属性は、マヤ南部地域の社会階層化をあきらかにしていく上で、有効な指標としてもちいることができると思われる。最後にこれらの指標についてまとめておき、今後の研究や発掘調査で得られる埋葬資料の解釈に資する基礎的情報を提供したい（図11）。

はじめに、「墓壙構造」は、最も簡素な土壙墓を最下層として、石棺墓、石室墓、墓室墓となるにつれて上位階層を示すと考えられる。こうした墓壙構造による分類は同時に社会内におけるおよその「水平位置」（例えば、王、貴族、農民など）も表現していると思われる。ただし、先古典期中

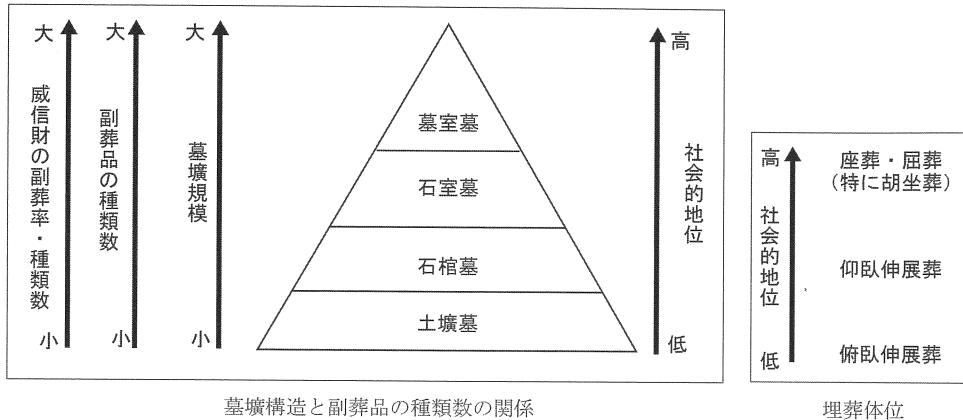


図 11 墓制からみたマヤ南部地域の階層表示の指標

期においてはまだこうした階層秩序は形成されていないと考えられる。

つぎに、「副葬品の種類数」は、墓壙構造が複雑であるほど、また規模が大きいほどその値が大きくなる傾向にある。したがって、墓壙構造間で一定の差異がうかがえればそれは社会内の上下関係を示す証左として有効である。また、ヒスイ（緑色石）製品、黒曜石製品、貝製品、赤・黄鉄鉱製品といった「威信財の副葬割合」を指標とすることで墓壙構造間または同一墓壙構造内のさらなる階層分化の状況を示すことが可能である。例えば、同じ墓壙構造において威信財が副葬される被葬者は、同じ墓壙構造に葬られる位相の人々のなかでもその地位が高い人物であったことが想定される。とくに、赤・黄鉄鉱製品の存在は上位階層者を示す有効な指標である。

つづいて、「特殊行為」については、特に古典期前期には墓への人身犠牲の有無が上位階層者の指標となりうる。一方、他の行為、例えば頭蓋変工や歯牙変工などは先古典期中期から土壙墓や石棺墓の被葬者にも頻出しており上位階層者を示す指標として必ずしも有効であるとはいえない。頭蓋変工については、アイデンティティー表象の一種とも考えられており [Tiesler 1998]、階層と結びつけるには慎重でありたい。ただし、土壙墓や石棺墓にみられる特殊行為の割合は限られており、社会内部で特殊な地位を有した人物であった可能性は十分に考えられる。

最後に、「埋葬体位」である。社会内の「垂直位置」を示す指標としてはあまり有効ではないことを分析の視点で述べた。しかし、マヤ南部地域の墓制においては、上述した諸属性と「埋葬体位」の関係には一定の相関関係が看取できることがわかった。先古典期では仰臥伸展葬が、古典期では座葬・屈葬が、墓壙構造が複雑かつ副葬品の種類数が多く、かつ威信財を多く含む墓に看取できるのである。したがって、埋葬体位によってもその社会内の「垂直位置」を類推することが可能であると考える。

5-3. 今後の課題と展望

以下、残された課題と今後の展望についてまとめておきたい。

はじめに、支配層や王権が生まれる背景、階層分化がすすむ背景に関するさらなる考察を要することである。本論では墓制がもつ諸属性の分析から先古典期中期頃から階層分化がはじまり、古典

期前期には二極化した階層社会が成立したことを想定した。しかし、その背景については威信財の獲得・所有をめぐる社会構成員間の競合関係を想定できるのみで、それ以外の可能性について検討できなかった。「副葬品の種類数」の差異は、工芸品へのアクセス、またはそうした製品を生産する工芸家や専業工人の組織・管理のあり方とも関係していると考えられ、より詳細な分析が必要になってこよう。工芸品の専業化と支配層の権力の関係については、青山らの重要な研究が参考になる[e.g. 青山 2003, 2007b; Aoyama 2009; Inomata 2001]。

次に、本論で得られた結果を作業仮説として、各遺跡あるいはより小地域レベルの分析に適用することである。本論では、「2-3. 分析にもちいる資料の性格と墓の諸属性」で述べたように資料的制約も考慮し、マヤ南部地域という地理的的には広い範囲を対象として全体的な理解を試みた。しかし、今後さらなる資料増加が見込まれれば、本研究を基礎として、地域性や各遺跡内のミクロな動態に注意を払う必要があるだろう。例えば、先古典期のチアパス高地の墓にみられる威信財の種類は「ヒスイ+貝」であり、グアテマラ高地では「ヒスイ+黒曜石」という違いがみられる。これは各地域によって位階標識としての威信財がもつ意義が異なっていたことを示唆する。また、各地域の盛衰の時期差も今後考慮すべき点として挙げておきたい。

最後に、その他の地域・時期の墓制と社会階層化の関係についてもみていく必要があるだろう。本論でもちいた墓制の諸属性はマヤ南部地域では有効性を示すものと考えられるが、マヤ中部地域や北部地域、あるいはその他のメソアメリカ地域ではどのような属性に基づいて階層性を抽出することが可能か検討する必要がある。また、時期については古典期マヤ社会の繁栄期ともいえる古典期後期はどのような変化が看取できるか、火葬が発達する後古典期ではどのような属性に着目し社会階層という問題に取り組むことができるのか、今後検討する必要があろう。

おわりに

メソアメリカ先スペイン期社会の発展を先導した、いわゆる「支配層」とよばれる人々の墓は「洗練された・豪華な・豊富な」といった形容詞で安易に表されてしまうことが多い。しかし、どの墓と比較してどの程度豪華なのか、豊富なのか、感覚的なものではなく考古資料をもじいて何を基準に支配層の墓であるのか否か、という疑問に端を発し本研究を開始した。本論はそうした基礎的研究の成果の一部であり、依然として課題も残る。マヤ考古学研究における「社会階層化」というテーマはセトルメント・パターンや専業化などさまざまな視点から研究がおこなわれており、墓制からの観点だけでは不十分であることも承知している。今後はさらなる資料収集をおこない、方法・解釈の妥当性についてさらに検討していきたい。

【謝辞】

執筆にあたっては、指導教官である山本直人先生、梶原義実先生の指導を承った。ここに記して深謝の意を表します。また、現地での資料収集や調査などについては伊藤伸幸先生（名古屋大学）、柴田潮音先生（エルサルバドル文化庁文化遺産局考古課）に多くのご教示をいただきました。青年海外協力隊の同士・村野正景氏（京都文化博物館）には常日頃多くの有益な助言をいただいている。謹んで感謝申し上げます。なお、本研究は日本科学財団平成21年度笹川研究助成、日本学術振興会

特別研究員奨励費の支援を受けておこなった調査成果の一部を含むものである。最後に、査読者の方々には本論文に対する有益なコメントをいただきました。記して感謝申し上げます。

註

- (註 1) 当時の噴火推定年代が紀元後 260±85 年 [Sharer 1978: 210] であった点は注意が必要である。現在は概ね紀元後 400 年頃である説が有力である [e.g. Dull et al. 2001; Kitamura 2010]。
- (註 2) 貝種については各著書・論文・報告書等に基づいている。同定されているものの多くはウミギクガイ、マクラガイなどの海産貝で、古代マヤ人にとって貴重な威信財のひとつである [青山 2005: 89]。また、イシガイなどの淡水貝も一部含まれている。加工品については同定が難しいと思われ貝種が不明なものも多い。淡水貝の重要性は、海産貝には劣るかもしれないが、通常河川または湖沼に生息しており採取は限られている点、出土する墓が限られるという点を考慮するならば、重要な製品のひとつであったことには変わりはない。そのため、本研究では広義の意味での「貝製品」という語をもちいて分析を進める。
- (註 3) 例えは、ヒスイの緑色は世界の中心を表す色であり、貝は死と再生の象徴であるとされた。黒曜石は、アステカ人の死生観にも現れ、時には薬用としても使用された [青山 2007a: 27]。円盤や黄鉄鉱やモザイク状ヒスイで製作された鏡は、テオティワカンでは象徴的眼・顔・鼻・火・水・クモの巣・女性の盾・太陽・洞窟 [Taube 1992]、「戦士」を表す [Sugiyama 2005: 229] など、様々な象徴として重宝された。そのため、これらは威信財として流通し、有力者の権威をイデオロギー的側面において支える道具のひとつとして使用または副葬されるようになった、と考えられる。
- (註 4) ロメロの歯牙変工の研究 [Romero 1958] に基づけば、古代メソアメリカにおける歯牙変工には、歯冠の中央部分に切り込みを入れたり、左右を削り落としたりする「削歯」、歯冠のほぼ中央にヒスイや黄鉄鉱などを象嵌する「飾歯」がある。
- (註 5) 図 8・9 は 1 基の墓に複数の人が埋葬される複数埋葬の場合、主被葬者のみを対象とし、報告書や出土状況から判別のつく事例のみを対象としている。このほか、側臥伸展葬または屈葬などの埋葬体位が存在するが全時期を通じて少數でありパターンが見いだせないため本論では割愛している。
- (註 6) 飾り板は、粘板岩製などの土台の上に黄鉄鉱、赤鉄鉱、ヒスイ、真珠、貝などを嵌め込み、モザイク状に装飾し、鏡的機能をもつもの (=Plaqueta) と、粘板岩で単純に円盤形をし、両端にひとつないしふたつの穿孔が施されるもの (=Disco) を含めている。

参考文献

Agrinier, P.

1964 *The Archaeological Burials at Chiapa de Corzo and Their Furniture*. Papers of the New World Archaeological Foundation No. 16, Bingham Young University, Provo, Utah.

青山和夫

- 1998 「交換、複合社会、古代マヤ都市—先コロンブス期マヤ低地における打製石器の通時的研究」『古代アメリカ』1: 3-40.
- 2003 「古典期マヤ支配層の手工業生産と日常生活—グアテマラ共和国アグアテカ遺跡出土の石器分析を通じて」『古代アメリカ』6: 1-33.
- 2005 『古代マヤー石器の都市文明』諸文明の起源 11 京都大学学術出版会, 京都.
- 2007a 『古代メソアメリカ文明—マヤ・ティカル・アステカ』講談社, 東京.
- 2007b 「古典期マヤ国家の権力基盤—グアテマラ共和国アグアテカ遺跡と周辺遺跡の石器研究を中心に—」『考古学研究』214: 70-90.
- 2007c 「「面の考古学」によるマヤ文明の石器と政治経済組織の通時的研究—パシオン地域のセイバル遺跡、アグアテカ遺跡と周辺遺跡の事例研究」『古代アメリカ』10: 23-49.

青山和夫、ファン・ペドロ・ラボルテ

- 2009 「マヤ文明の黒曜石の遠距離交換と石器製作の通時的变化—グアテマラ共和国ペテン地方南東部・中央西部の「面の考古学」調査から—」『古代アメリカ』12: 1-38.
- 2011 「マヤ文明の環境利用例としての石器製作と戦争」『考古学研究』229: 37-53.

Aoyama, K.

- 2001 Classic Maya State, Urbanism, and Exchange: Chipped Stone Evidence of the Copán Valley and Its Hinterland. *American Anthropologist* 103(2): 346-360.
- 2009 *Elite Craft Producers, Artists, and Warriors at Aguacateca: Lithic Analysis*. The University of Utah Press, Salt Lake City, Utah.

Binford, L.R.

- 1971 Mortuary Practices: Their Study and Their Potential. In *Approaches to the Social Dimensions of Mortuary Practices*. Memoirs of the Society for American Archaeology 140, pp.6-29.

Blake, M.

- 1991 An Emerging Early Formative Chiefdom at Paso de la Amada, Chiapas, Mexico. In *The Formation of Complex Society in Southeastern Mesoamerica*, edited by Fowler, W.R., pp.27-46. CRC Press, Boca Raton.

Boone, E.H. and G.R. Willey (eds.)

- 1988 *The Southeast Classic Maya Zone. A Symposium at Dumbarton Oaks 6th and 7th October 1984*. Dumbarton Oaks, Washington, D.C.

Bove, F.J.

- 1989 *Formative Settlement Patterns on the Pacific Coast of Guatemala: A Spatial Analysis of Complex Societal Evolution*. BAR International, Oxford.

Bove, F.J. and S. Medrano

- 2003 Teotihuacan, Militarism, and Pacific Guatemala. In *Teotihuacan and the Maya: Reinterpreting Early Classic Interaction*, edited by Braswell, G.E., pp.45-79. University of Texas Press, Austin.

Bove, F.J., S. Medrano, B. Lou and B. Arroyo

- 1993 *The Balberta Project. The Terminal Formative-Early Classic Transition on the Pacific Coast of*

- Guatemala*. University of Pittsburgh and Association Tikal, Guatemala.
- Braswell, G.E. (ed.)
- 2003 *The Maya and Teotihuacan: Reinterpreting Early Classic Interaction*. University of Texas Press, Austin.
- Braswell, G.E. and E.J. Robinson
- 2011 The Eastern Cakchiquel Highlands during the Preclassic Period. In *The Southern Maya in the Late Preclassic: The Rise and Fall of an Early Mesoamerican Civilization* edited by Love, M. and J. Kaplan, pp.287-315. University Press of Colorado, Colorado.
- Brown, J.A.
- 1981 The Search for Rank in Prehispanic Burials. In *The Archaeology of Death*, edited by Chapman, R., I. Kinnes and L. Randsborg, pp.25-39. Cambridge University Press, Cambridge.
- Brumfiel, E.M. and T.K. Earle
- 1987 *Specialization, Exchange and Complex Societies*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Carr, C.
- 1995 Mortuary Practice: Their Social, Philosophical-religious, Circumstantial, and Physical Determinants. *Journal of Archaeological Method and Theory* 2 (2): 105-200.
- Clark, J.E., R.D. Hansen, y T.P. Suárez
- 2000 La zona maya en el Preclásico. In *Historia antigua de México vol.1: El México antiguo, sus áreas culturales, los orígenes y el horizonte Preclásico*, editado por Manzanilla, L. y L.A. Leonardo, pp.437-510. INAH, México.
- Coe, M.D.
- 1965 The Olmec Style and its Distributions. In *Handbook of Middle American Indians: Archaeology of Southern Mesoamerica II*, edited by Wauchope, R. and G.R. Willey, pp.739-787. University of Texas Press, Austin.
- Demarest, A.A.
- 1986 *The Archaeology of Santa Leticia and the Rise of Maya Civilization*. Middle American Research Institute, Tulane University, New Orleans.
- 1988 Political Evolution in the Maya Borderlands: The Salvadoran Frontier. In *The Southeast Classic Maya Zone. A Symposium at Dumbarton Oaks 6th and 7th October 1984*, edited by Boone, E.H. and G.R. Willey, pp.335-394. Dumbarton Oaks, Washington, D.C.
- 2004 *Ancient Maya: The Rise and Fall of a Rainforest Civilization*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Demarest, A.A. and A. Foias
- 1993 Mesoamerican Horizons and the Cultural Transformations of Maya Civilization. In *Latin American Horizons*, edited by Rice, D.S., pp.147-191. Dumbarton Oaks, Washington D.C.
- Demarest, A.A. and R.J. Sharer
- 1986 Late Preclassic Ceramic Spheres, Culture Areas and Cultural Evolution in the Southeastern Highlands of Mesoamerica. In *The Southeast Maya Periphery*, pp.194-223. University of Texas

- Press, Austin.
- Dull, R.A., J.R. Southon and P.D. Sheets
- 2001 Volcanism, Ecology and Culture: A Reassessment of the Volcán Ilopango TBJ Eruption in the Southern Maya Realm. *Latin American Antiquity* 12: 25-44.
- Estrada-Belli, F.
- 1999 *The Archaeology of Complex Societies in Southeastern Pacific Coastal Guatemala: A Regional GIS Approach*. BAR International, Oxford.
- Fitzsimmons, J.L.
- 2002 *Death and the Maya: Language and Archaeology in Classic Maya Mortuary and Ceremonialism*. Ph.D. dissertation thesis, Harvard University.
- Fowler, W.R. (ed.)
- 1991 *The Formation of Complex Society in Southeastern Mesoamerica*. CRC Press, Boca Raton.
- Gifford, J. C.
- 1976 *Prehistoric Pottery Analysis and the Ceramics of Barton Ramie in the Belize Valley*. Peabody Museum Memoirs 18, Harvard University, Cambridge.
- González Licón, E.
- 2005 Evaluación de indicadores arqueológicos para estudiar el proceso de estratificación social en el formativo mesoamericano. En *IV Coloquio Pedro Bosch Gimpera Tomo II: Veracruz, Oaxaca y Mayas*, editado por Vargas, E., pp.617-640. UNAM, México.
- Grube, N. (ed.)
- 1995 *The Emergence of Lowland Maya Civilization: Transition from the Preclassic to the Early Classic*. Acta Mesoamericana No.8, Verlag Anton Sauwein, Germany.
- Guernsey, J.
- 2006 *Ritual and Power in Stone: The Performance of Rulership in Mesoamerican Izapan-Style Art*. University of Texas Press, Austin.
- Hodder, I. (ed.)
- 1982 *Symbols in Action: Ethnoarchaeological Studies of Material Culture*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Houston, S.D. and Inomata, T.
- 2009 *The Classic Maya*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Inomata, T.
- 2001 The Power and Ideology of Artistic Creation: Elite Craft Specialists in Classic Maya Society. *Current Anthropology* 42 (3): 321-349.
- Joyce, R.A.
- 2004 Mesoamerica: A Working Model for Archaeology. In *Mesoamerican Archaeology*, edited by Hendon, J.A. and R.A. Joyce, pp.1-42. Blackwell, Oxford.
- Kidder, A.V
- 1940 Archaeological Problems of the Highlands Maya. In *The Maya and Their Neighbors: Essays on*

- Middle American Anthropology and Archaeology*, edited by Hay, C.L. et al., pp.117-125. Dover Publications, New York.
- Kidder, A.V., J.D. Jennings and E.M. Shook
- 1946 *Excavations at Kaminaljuyú, Guatemala*. Carnegie Institution of Washington, Washington D.C.
- Kitamura, S.
- 2010 Two AMS Radiocarbon Dates for the TBJ Tephra from Ilopango Caldera, El Salvador, Central America. *Bulletin of Faculty of Social Work, Hirosaki Gakuin University* 10:24-28.
- Longyear, J.M.
- 1944 *Archaeological Investigations in El Salvador*. Harvard University, Cambridge.
- Lothrop, S.K.
- 1939 The Southeastern Frontier of the Maya. *American Antiquity* 41: 42-54.
- Love, M.
- 2011 Critical Issues in the Southern Maya Region and the Late Preclassic Period. In *The Southern Maya in the Late Preclassic: The Rise and Fall of an Early Mesoamerican Civilization* edited by Love, M. and J. Kaplan, pp.3-24. University Press of Colorado, Colorado.
- Love, M. and J. Kaplan (eds.)
- 2011 *The Southern Maya in the Late Preclassic: The Rise and Fall of an Early Mesoamerican Civilization*. University Press of Colorado, Colorado
- Lowe, G.W.
- 1962 *Mound 5 and Minor Excavations, Chiapa de Corzo, Chiapas, Mexico*. Papers of the New World Archaeological Foundation No.12, Bingham Young University, Provo, Utah.
- Lowe, G.W., T.A. Lee Jr, and E.M. Espinoza
- 1982 *Izapa: An Introduction to the Ruins and Monuments*. Papers of the New Archaeological Foundation No.31, Bingham Young University, Provo, Utah.
- Luján, L.L. y G. Oliver (eds.)
- 2010 *El sacrificio humano en la tradición religiosa mesoamericana*. INAH, México.
- Marcus, J. and R.E.M. Adams
- 2005 The Formative Period in Mesoamerica: An Overview. In *New Perspectives on Formative Mesoamerican Cultures*, edited by Powis, T.G., pp.203-211. BAR international, Oxford.
- McAnany, P.A.
- 1995 *Living with the Ancestors: Kinship and Kingship in Ancient Maya Society*. University of Texas Press, Austin.
- Michels, J.W.
- 1979 *The Kaminaljuyu Chiefdom*. The Pennsylvania State University Press, Philadelphia.
- 中村誠一
- 2007 『マヤ文明を掘る コパン王国の物語』 日本放送出版協会, 東京.
- 大井邦明
- 1994 「第11部 カミナルフユの歴史と文化」 大井邦明編『カミナルフユ』 vol.2, pp.724-744. タ

- バコと塩の博物、東京.
- O'Shea, J.
- 1981 Social Configurations and the Archaeological Study of Mortuary Practices: A Case Study. In *The Archaeology of Death*, edited by Chapman, R., I. Kinnes and L. Randsborg, pp.39-52. Cambridge University Press, Cambridge.
- Pearson, M.P.
- 2008 *The Archaeology of Death and Burial* (5th printing). Texas A&M University Press, College Station.
- Popenoe de Hatch, M.
- 1989 A Seriation of Monte Alto Sculptures. In *New Frontiers in the Archaeology of the Pacific Coast of Southern Mesoamerica*, edited by Bove, F.J. and L. Heller, pp.25-41. Arizona State University, Tempe.
- Popenoe de Hatch, M., C. Schieber de Lavarreda and M. Orrego Corzo
- 2011 Late Preclassic Developments at Takalik Abaj. In *The Southern Maya in the Late Preclassic: The Rise and fall of an Early Mesoamerican Civilization* edited by Love, M. and J. Kaplan, pp.203-236. University Press of Colorado, Colorado.
- Powis, T.G.
- 2005 Formative Mesoamerican Cultures: An introduction. In *New Perspectives on Formative Mesoamerican Cultures*, edited by Powis, T.G., pp.1-14. BAR International, Oxford.
- Ruz, A. L.
- 1968 *Costumbres funerarias de los antiguos mayas*. Fondo de Cultura y Economía, México.
- Romero, J.
- 1958 Mutilaciones dentarias prehispánicas en México y América en general. *Serie Investigaciones no.3*. INAH, México.
- Sanders, W.T. and J.W. Michels
- 1977 *Teotihuacan and Kaminaljuyu*. Pennsylvania State University Press, Philadelphia.
- Santley, R.S.
- 1983 Obsidian Trade and Teotihuacan Influence in Mesoamerica. In *Highland Lowland Interaction Influence in Mesoamerica: Interdisciplinary Approaches*, edited by Miller, A.G. pp.243-291. Dumbarton Oaks, Washington D.C.
- Schiever de Lavarreda, C.
- 2003 Una nueva ofrenda en Abaj Takalik: El Entierro 1. En *XVI Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala*, editado por Laporte, J.P., B. Arroyo, H. Escobedo and H. E. Mejía, pp.797-806. Ministerio de Cultura y Deportes, IDAEH, Asociación Tikal, Guatemala.
- Schiever de Lavarreda, C. y M. Orrego Corzo
- 2010 Preclassic Olmec and Maya Monuments and Architecture at Takalik Abaj. In *The Place of Stone Monuments: Context, Use, and Meaning in Mesoamerica's Preclassic Transition*, edited by Guernsey, J., J.E. Clark, and B. Arroyo, pp.177-205. Dumbarton Oaks, Washington D.C.
- 2011 La pasión del Señor de la Greca. Proyecto Nacional Tak'alik Ab'aj, Ministerio de Cultura y

- Deportes, Dirección General de Patrimonio Cultural y Natural/IDAEH. En *XXIV Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala, 2010*, editado por Arroyo, B., L. Paiz y H.E. Mejía, pp.655-673. Museo Nacional de Arqueología y Etnología, Guatemala.
- 2012 El retorno al ancestro en Tak'atik Ab'aj: Hallazgo del collar del ancestro del “Señor de la Greca” En *XXV Simposio de Investigaciones en Guatemala, 2011*, editado por Arroyo, B, L. Paiz y H.E. Mejía, pp.1045-1055. Ministerio de Cultura y Deportes, IDAEH, Asociación Tikal, Guatemala.
- Sharer, R.J.
- 1974 The Prehistory of the Southeastern Maya Periphery. *Current Anthropology* 15(2): 165-187.
 - 1978 *The Prehistory of Chalchuapa, El Salvador vol. III*. University Pennsylvania Press, Philadelphia.
 - 1992 The Preclassic Origin of Lowland Maya States. In *New Theories on the Ancient Maya*, edited by Danien, E.C. and R.J. Sharer, pp.131-136. The University Museum, University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Sharer, R.J. and J.C. Gifford
- 1970 Preclassic Ceramics from Chalchuapa, El Salvador, and Their Relationships with the Maya Lowlands. *American Antiquity* 35(4): 441-462.
- Sharer, R.J. and L.P. Traxler
- 2006 *The Ancient Maya* (6th edition). Stanford University, California.
- Sheets, P.D.
- 1983 Introduction. In *Archaeology and Volcanism in Central America: the Zapotitán Valley of El Salvador*, edited by Sheet, P.D., pp.1-13. University of Texas Press, Austin.
- Shook, E.M.
- 1952 *Lugares arqueológicos del altiplano meridional central de Guatemala*. Antropología e Historia de Guatemala IV(2). Ministerio de Educación Pública, Guatemala.
- Shook, E.M. and A.V. Kidder
- 1952 *Mound E-III-3, Kaminaljuyu, Guatemala*. Carnegie Institution of Washington, Washington D.C.
- Smith, A. L.
- 1955 *Archaeological Reconnaissance in Central Guatemala*. Carnegie Institution of Washington, Washington D.C.
- Smith, A.L. and A.V. Kidder
- 1951 *Excavations at Nebaj, Guatemala*. Carnegie Institution of Washington, Washington D.C.
- Smith, V.G.
- 1984 *Izapa Relief Carving: Form, Content, Rules for Design, and Role in Mesoamerican Art History and Archaeology*. Studies in Pre-Columbian Art and Archaeology No.27. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington D.C
- Spinden, H.J.
- 1915 Notes on the Archaeology of El Salvador. *American Anthropologist* 17: 446-487.
- Sugiyama, S.
- 2005 *Human Sacrifice, Militarism, and Rulership: Materialization of State Ideology at the Feathered*

- Tainter, J.M.
- 1977 Modeling Change in Prehistoric Social System. In *For Theory Building in Archaeology*, edited by Binford, L.R., pp.327-352. Academic Press, New York.
- 1978 Mortuary Practices and the Study of Prehistoric Social Systems. In *Advances in Archaeological Method and Theory vol. 1*, edited by Schiffer, M., pp.106-143. Academic Press, New York.
- Taube, K.
- 1992 The Iconography of Mirrors at Teotihuacan. In *Art, Ideology, and the City of Teotihuacan*, edited by Catherine Berlo, J. pp.169-204. Dumbarton Oaks, Washington D.C.
- Thompson, J.E.
- 1948 *Archaeological Reconnaissance in the Cotzumalguapa Region, Escuintla, Guatemala*. Carnegie Institution of Washington, Washington, D.C.
- Tiesler, V.B.
- 1998 *La costumbre de la deformación cefálica entre los antiguos mayas: Aspectos morfológicos y culturales*. INAH, México.
- Urban, P.A. and E.M. Schortman (eds.)
- 1986 *The Southeast Maya Periphery*. University of Texas Press, Austin.
- Wason, P.L.
- 1994 *The Archaeology of Rank*. Cambridge University Press, Cambridge. Welsh, W.B.M.
- Welsh, B.M.
- 1988 *An Analysis of Classic Lowland Maya Burials*. BAR International, Oxford.
- Whittington, S.L. and D.M. Reed (eds.)
- 1997 *Bones of the Maya: Studies of Ancient Skeletons*. Smithsonian Institution Press, Washington, D.C.
- Willey, G.R.
- 1977 El surgimiento de la civilización maya: resumen. En *Los orígenes de la civilización maya*, editado por Adams, R.E.W., pp.417-459. Fondo de Cultura Económica, México.

Patrón Funerario y Sociedades en la zona Sur Maya: desde el Período Preclásico Temprano al Período Clásico Temprano

Akira Ichikawa

(Universidad de Nagoya / Sociedad Japonesa para la Promoción de Ciencia)

Palabras Clave: Sur Maya, Patrón Funerario, Estratificación Social, Preclásico, Clásico

El surgimiento de la estratificación social en la civilización maya ha sido identificado en el Período Preclásico Medio. Asimismo, diversos estudios consideran que las sociedades del Período Clásico tendrían una organización social compleja, de estructura piramidal y gobernada por élites. Sin embargo, dichos estudios no han tomado suficiente consideración del patrón funerario.

Por lo tanto, el presente artículo estudia el proceso de estratificación social en la zona Sur Maya a través de los patrones funerarios desde el Período Preclásico Temprano al Período Clásico Temprano. Este análisis se basa en la correlación entre el tipo de fosa, la diversidad de las ofrendas y la cantidad de materiales sumptuosos depositados en cada entierro, tales como artefactos de jade, concha, obsidiana y pirlita (o hematita). A base de esta información se sugiere que en el Período Preclásico Tardío ya existían ciertos niveles de posición social, tanto vertical como horizontal. En el Período Clásico Temprano se observa claramente que las élites controlaban la obtención y el acceso de materiales prestigiosos para fortalecer y mantener su poder en la sociedad. Esta estrategia de control se refleja en el patrón funerario, lo cual se reconoce a través de los datos arqueológicos.

原稿受領日 2012年7月20日
原稿採択決定日 2012年9月22日